

学園だより

特別号

社会福祉法人 至誠学舎立川

至誠学園

平成 19 年 6 月 20 日

〒190 - 0022 東京都立川市錦町 6 - 26 - 15

TEL 042 - 524 - 2601 FAX 042 - 524 - 2367

HP <http://www.shisei.org> e-mail info@shisei.org

発行責任者 施設長 高橋 久美子



特集

学園のお母さん 故高橋田鶴子先生を偲んで

至誠学園のお母さんと呼ばれ、学園の創設の時から今日まで、学園の子どもたちの健やかな成長を願いあらゆる努力をされてきた高橋田鶴子学園顧問が、4月24日入院先の立川中央病院において肺炎のためにご逝去されました。享年91歳でした。

「不知鳥のごとく蘇るお母さん」と、慶應義塾大学ライチウス会のOBの方からお手紙をいただきました。何回か倒れながらも必ずまた元気に車椅子ではありますが、子どもたちとともに過ごすことの多かった日々を思いますと、誠に残念でたまりません。

大正5年に創設者稲永久一郎夫妻の次女として生まれ、以後少年保護の仕事、戦後の再建への努力、そして至誠学園の開設、至誠保育園の開設、また、遠く日野から通う子どもたちのために至誠第二保育園の開設など、ひたすら子どもたちのことを考え、多くの周囲の方々のお力添えを得ながら、たゆまぬ努力をされていました。また、創設当時、昼間の仕事を終えてから資格を得るために夜学の養成所へ通学したこともありました。地域の青年団の人たちは先生が帰園するのを待ってフォークダンスをしたり、若い方々との交流をしていたのも、もう50年も昔の話です。

最近では、幼児のためにモンテッソーリ教育を取り入れ保育室を開設したり、就職になかなか困難な子どもたちのために、小規模授産施設の開設を考え、自ら温めていたレシピを使ってクッキーを焼いたり、色々なアイデアを次々と実践されていました。

平成19年5月2日午後2時より、至誠学園かしの木プラザのホールにて、学園のお母さんの学園葬が執り行われました。葬儀委員長に小川友一衆議院議員(至誠保育園卒園生)、司会は至誠学園副園長石田芳朗が務めました。

初めに学園の関係者を中心に、子どもたちによる学園のお母さんを送る会を行いました。会の進行は至誠学園職員松浦晶子が行い、学園のお母さんの紹介、モンテッソーリ立川子どもの家の子供たちからのメッセージ、そして、学園の子どもたちと職員によるメッセージ、そして最後に全員でお母さんがお好きだった叙情歌「花」と賛美歌「おおしくあれつよくあれ」、「四季の歌」、「学園歌」を合唱しました。

続いて告別式が執り行われました。青山善光寺の導師による読経の後、甲電の披露がありました。続いて至誠学舎立川理事長の関岡武次様、至誠学舎立川顧問の仲村優一様、東京都福祉保健局少子社会対策部長の都留佳苗様、至誠学園卒園生友の会々長の松本正利様より甲辞をいただきました。告別式は多くの方々のお別れによって行われました。葬儀には約800人の方のご参列をいただきました。

弔辞

社会福祉法人 至誠学舎立川
理事長 関岡 武次
平成 19 年 5 月 2 日

社会福祉法人 至誠学舎立川を代表して、故高橋田鶴子先生の御霊に謹んで弔辞を捧げます。

先生は大正 5 年 4 月、本法人創設者故稲永久一郎氏の次女として東京神田に生を享けられ、昭和 9 年同氏の事業の一つである司法保護団体至誠学舎に於いて、少年の指導育成に従事されました。いっとき御結婚の為仕事から離れましたが、戦時色濃くなった昭和 19 年再び復帰され、戦災により学舎が立川に移転したのに伴い勤務も移られ、爾来一貫してこの地で児童福祉事業の携わって来られました。その後本法人の児童福祉事業は、養護施設至誠学舎から保育事業に進出し、またある時は働く母親の為に授産事業を手掛けるなど、戦後の混乱期、そして復興期、高度成長期と打続く社会情勢の変化に対応して、様々の展開をして参りましたが、田鶴子先生は常にその先頭に立って優れた指導力を発揮されて来られました。

田鶴子先生が勤められた至誠学園副園長、至誠保育園園長、至誠第二保育園園長、立川モンテッソーリ子ども園長等々の御経歴は、至誠学舎立川の児童福祉事業の歴史そのものであります。また、先生は大変研究熱心であられ、常に社会福祉の新しい展開、児童福祉の向上に心を用いてこられました。戦後新しく社会福祉主事制度が制定され資格認定講習会が開催されると、既に社会福祉事業に携わっておられた、阿、橋本の両姉妹と共に、三人揃って教室の最前列に陣取って熱心に聴講されたことは、今も語り草となっております。

こうしたご活躍の一方、御家庭にあっては 4 人のお子様を立派に育てられ、福祉事業の後継者とされました。晩年、ややお身体が御不自由になられてからも常に学園の子どもたちの姿が見たい、その元気な声を聞きたいと、学園の一隅にあるお住居から外を見やる毎日であったと伺っております。生来の温かなお人柄に加え、故稲永久一郎翁の御遺志をよく継がれ、91 年の一生を児童福祉一筋に捧げられ、「学園のお母さん」と多くの子どもたちに慕われました。昭和 46 年、叙勲の栄に輝かれたことは、その他の数々の表彰と共に、先生の御功績の偉大さを示すものであります。

私共、社会福祉法人 至誠学舎立川の役職員一同、先生が身をもって示された「誠の心」を受け継ぎ、創立百周年を迎えようとする法人の活動を息むことなく発展させ続けることを、先生の御霊にあらためてお誓い申し上げ弔辞といたします。

至誠学園園母 故高橋田鶴子先生 略歴

- 大正 5 年 4 月 29 日 東京都神田に生まれる。
- 昭和 9 年 3 月 私立東洋高等女学校卒
- 全 9 年 司法保護団体至誠学舎 少年の指導育成に従事す
- 全 12 年 結婚のため退舎
- 全 19 年 財団法人至誠学舎立川支所に於いて少年の指導育成に従事す
この間宮内省職員が満州出世中に家族と共に少年達と立川に移動
- 全 21 年 5 全上至誠学舎戦災により立川本舎となる
創設者病死により宮内省を退官し復員した夫と共に法人事業再興のために尽力 新たな時代の児童福祉、老人福祉を目指す
- 全 24 年 全上児童福祉法に転換後、至誠保育園開設、元理事長稲永ヨシ園長を扶け、園児の保育に従事す
- 全 25 年 保姆資格児童福祉法 13 条第 1 項第 1 号 東京都 655 号
- 全 26 年 社会福祉主事任用資格取得
- 全 27 年 教育職員免許法第 5 条幼稚園教諭
- 全 28 年 東京都調理師条例による資格合格
- 全 26 年 児童福祉施設至誠学園開設。主任保姆として園児の育成に従事す
- 全 31 年 母 稲永ヨシ前保育園長死去により、至誠保育園長、至誠学園副園長となる
- 全 34 年 日野市東町(あずまちょう)に至誠第二保育園開設園長に任ぜられる
授産室を併設し母親たちに働く場所を提供
- 全 43 年 夫 利成死亡に依り、学園長 高橋利一、至誠第二保育園長 高橋紘、
学舎理事 高橋田鶴子、理事会の決議でそれぞれ承認され、引き続き副園長として、各園長を補佐す
以後要保護児童の育成に対し園母として職員養成、児童の家族の再統合、卒園生のアフターケアの充実などに
献身努力する。
- 全 53 年 4 月 1 日 学園幼児のために保育教育の場として「モンテッソーリ立川子どもの家」を開設し園長となる。
- 全 60 年 8 月 至誠学園顧問となる
- 平成 19 年 4 月 逝去と共に辞す
- 平成 19 年 4 月 24 日 肺炎のため逝去 享年 91 歳

- 特技 調理その他
- 理念 誠の心のはたらきは人の心を動かすばかりでなく天に通じ神ず
- 教訓 ゆったりと機敏に
子どもと接するときは全てをさておき、ゆったりとした気持ちで受け入れなさい
そして仕事は順序だてて機敏にできるよう努力しなさい
“愛情は技術なり”
学園の子どもたちを育てるには思いだけではいけません
いまこの子の求めていること、将来を見据えて何が必要なのか具体的な方法を考え共に手足をつかって共に動き、心を働かせなさい
- モットー 明るく 直く 健やかに



東京都福祉保健局少子社会対策部長の都留様より弔辞をいただく



葬儀委員長小川友一衆議院議員からの挨拶

弔辞

社会福祉法人 至誠学舎立川
顧問 仲村 優一
平成 19 年 5 月 2 日

高橋のおばあちゃんと呼ぶことをお許しください。

私は、今、関岡理事長の弔辞にございましたように、3人の姉妹、至誠学舎東京の阿常務理事長の亡くなったお母様、阿よね様、それからあなた、それから今日ここにおいでの高橋常務理事のお母様、お三人が、経歴によりますと、1951 年になりますけれども、財団法人中央社会福祉協議会の社会福祉の資格認定講習会に、ちょうど私が教員をしておりました日本社会事業大学の旧制の専門学校が、厚生省から委託を受けて任意でやっておりました社会福祉主事認定講習会の、二ヶ月だったと思いますけれども、小石川の研修所でやりました社会福祉の認定講習会の、そこでケースワークをお教えした教員でした。

そういう経緯ですけれども、その学生であったお三人をお教えしたということは、その後の経歴その他の、それからその後ご縁があってこの法人の理事長を務めいろいろなことに関わるようになり、また、この法人の福祉事業、社会福祉法人至誠学舎東京も含めてですけれども、すでに今日数限りなく色々な貴重な経歴経過を報告されていますけれども、そういう一つの新しい福祉の実践モデルとして全ての事業を展開されていることになって、その大元のところで、たまたまお三人がこういう形で私のところに学生としておいでになった、大変これは幸い恐縮なことですが、先月の理事会に出席した折にお会いしたのに、こういう形で今日お送りしなければならなくなりました。大変残念でございますが、どうぞ安らかにお休みになっていただきたいと思ひます。

いろいろ申し上げたいことを、長い経歴経験の中で、私自身学んだことだけでなく、いろんなことをお話しなければならないと思ひますが、いただいた時間は数分でございますから、もう時間がございませんので、これで私の今日のお送りする言葉に代えさせていただきますと思ひます。

どうぞ安らかにお休みになって下さい。

弔辞

平成 19 年 5 月 2 日
東京都福祉保健局
少子社会対策部長 都留 佳苗

本日、社会福祉法人 至誠学舎立川の顧問であられました高橋田鶴子先生の至誠学園葬が執り行われるにあたり、東京都を代表いたしまして謹んでお別れの言葉を申し上げます。

「至誠学園のお母さん」と子どもたちに慕われた故高橋田鶴子先生、あなたは至誠学舎創設者の次女としてこの世に生を受け、親の背を見て子どもたちの指導育成に従事されました。あなたが東京の子どもたちのために捧げられた七十余年に及ぶ生涯における功績については、今さら申し述べるまでもありません。常に新たな時代の児童福祉、老人福祉を目指し仕事に取り組みまれてきました。昭和 43 年にご主人を亡くされたときも、あなたは東京の子どもたちのために、必死に施設運営を安定化させようと、法人理事も勤められながら副園長として各園長を補佐していたと伺っております。以後、要保護児童の園母としてアフターケアの充実にも献身努力されてきました。その功績はたとえようもなく大きいものがあります。

あなたは、いつも子どもたちに優しく語り掛けられ、その温和な性格でもって、後のモンテッソーリ立川子どもの家の園長として、子どもたちに深い愛情をそそがれました。あなたのその遺志は、同じ道を追う、長男高橋利一学園長が継いで行かれるに違いありません。深く哀悼の意を表し、御霊の安らからんことをお祈りして弔辞といたします。

弔辞

平成 19 年 5 月 2 日
至誠学園友の会 代表 松本正利

私達も経験したことのない戦後の苦難の時代を挟んで、お母さんは大正・昭和・平成の三時代を歩いてこられました。自分一人が生きて行くことも容易ではなかった時がありだったでしょうに、いつも温かく、やさしく、そして時として厳しく、私達を両腕で包み込んでいてくださいました。年上の子にも、年下の子にも、男の子にも、女の子にも、常に等しく分け隔てなく接してくださいました。

「学園へ行けば、そこにはお母さんが居てくれる」
そう思うだけで人は安心感を持つことができます。

でも、お母さん、とうとうお別れの時がやって参りました。

お母さんのお陰で、それぞれ今ある私達ですが、これからはしっかり前を見つめて、足を踏んばって、頑張っていきます。どうか天国から私達を見守っていて下さい。いくら申し上げても言葉で足りるものではございませんが、今日まで戴いたたくさんのご恩に感謝しつつ、私なりに万感の思いを込めてお別れの言葉を申し上げます。

「長い間、本当にありがとうございました。」
そして、「さようなら、お母さん」

昭和 27 年から、学園のお母さんの意向に心を打たれて今日まで創作舞踊のご指導をして下さり深い親交のあった邦千谷先生より

お母さまの涙
邦 千谷

お母様の涙は、熱いお母様の心の中から流れ出す熱い涙です。喜びの涙、悲しみの涙、心配の涙が、ポトポト、お母様の頬をつたわって流れては消えました。そして私は、その涙を幾度も見ました。戦災まだ間もない荒廃した時代での困難な福祉のお仕事、子供達に対する深い愛情の注がれ方を、目の前に見る度に、私は今まで知らなかった世界にめぐり会えた事を嬉しく思い驚きました。すべての人は、母の胎内を通過して生まれて来ます。まっ暗で、温かく神秘的な母の胎内。お母様の体の全ては、その胎内だと私は思うのです。亡くなられたお父さまとお母様の深いつながりは、スペインの画家、ダリと彼の最愛の妻、ガラに似ていると、このごろ美術雑誌でダリの記事を読みながら考えました。沢山の子ども達が、お母様の胎内を通過して成長し、出発して行きました。生まれたわけではないのに…。でもこれは、私の芸術的な深い発想なのです。子ども達をつつむお母様の深い愛は、胎内と同じなのですから、涙とともに深い呼吸をつづけていらしたお母様、おめでたいこの春を、新しい出発として、どこまでもお進み下さい。お元気でとまることなくお進み下さい。



子どもたちからお別れの歌

学園のお母さんのご逝去に哀悼の意を捧げつつ、『蓮の台(うてな) - 学園のお母さんと呼ばれて』(平成 5 年 12 月発行)にご寄稿いただいたものを掲載させていただきます。

お母さんへのメッセージ

至誠学園と歩んで
元至誠学園 書記 栗田菊枝

昭和三十五年の秋、前園長先生ご夫妻を訪ね、初めて至誠学園を知りました。そのころ、世の中は、敗戦の混乱からようやく立ち直り、社会の秩序も次第に整い、長年の生活苦からホッと一息ついたころでした。

ご好意で立川に住むようになってから、学園の担う役割の大事さや、ご夫妻の子どもたちの育成に対する深い愛情とひたむきなまでの努力をまのあたりにし、強く心を打たれました。何か私にできる事でお手伝いを…。これが学園と私のつながりの始めでした。

以来二十七年の間、主に経理面を担当し、今日まで学園と共に歩んできたのです。そのころ、創設当時の苦しかったお話をよく伺いました。六十五人の子供たちの布団を描えるために、新学期の準備のために、子どもたちに新しい衣類を……と、その都度ご自分の財産を処分しては切り抜けてこられたそうです。自分が会計に携わってみて、このやりくりのご苦労は十分すぎるほど理解できました。

ちょうどそのころ、園舎の傷みがひどく、懸案であった新園舎の建設の機運が高まり、今度は、日夜その事への努力が始まりました。新しい構想を取り入れ何度も何度も計画を練り直し、苦しい財政をとにかく切り抜け、昭和三十九年落成を見た時の感慨は、ひとしおでした。残念な事に、間もなく前園長先生は病を得、皆の祈りもむなしく亡くなられましたが、そのころの身を削るような心労が障ったのではないのでしょうか…。

しかし、その意思是現園長先生に受け継がれ、常に新しい時代に即した感覚で、養護施設としての機能を十分果たしております。いつでも協力を惜しまない善意の人たちとのまじわりや、学園を取り巻く四季折々の自然の美しさ、元気な子どもたちの声などに魅せられて、私には荷の重い仕事でしたが、定年を迎えるまで続けられたのだと感謝しています。